

「劔岳 点の記」の撮影が 順調に進んでいます

浦郷武夫

(社)日本測量協会・月刊「測量」編集

Urigo Takeo

東映株式会社は昨年、映画『劔岳 点の記』の制作に入りました。監督は木村大作監督。四月から山に入り実景撮影をすすめ、九月中旬からは俳優が参加し本格的な撮影を開始しました。十月末に第一次口ケを無事終了したとのこと。今年は三月から再び口ケーションを開始し、夏までスケジュールをこなすということです(口ケ日数は延べ二〇〇日以上にわたる)。完成は二〇〇八年末の予定。二〇〇九年公開の予定になっています。

『劔岳 点の記』は『八甲田山』『富士山頂』などで知られる新田次郎の同名小説が原作です。劔岳はその険しさから「針の山」といわ

れ、人を寄せ付けない未踏峰であり、また宗教上の理由からも登ってはならない山とされてきました。そこに明治四十年、陸軍参謀本部に所属していた陸地測量部の柴崎芳太郎(浅野忠信)、柴崎を助ける立山の案内人宇治長次郎(香川照之)が、国家基準点(三角点)を設置すべく不屈の闘志で挑んだ実話です。新田次郎の小説作品は、大自然・山岳が舞台の作品が多く、たくさん映画化されています。しかし、撮影の難しさや制作費などの理由があつて、この『劔岳 点の記』は残っていました。しかしこの作品は、少しでも登山に関心のある人たちの中では名作として知られています。

実は、この作品は登山関係者だけでなく、測量・地図にたずさわる人たちの中でもバイブルであるのです。

日本測量協会のスタンスについて

この映画では、インフラの基になる国家基準点を設置するという大切な仕事に従事した測量技術者を取り上げています。こうした「測量」という仕事を正面から取り上げた映画はあまりありません。この映画を通じて、人々は先人たちの苦闘の上にある「位置情報」という成果の再認識をするとともに、日頃縁の下の力持ち的な立場の測量技術者が、



劔岳の撮影現場。左から木村大作監督、小市慢太郎、浅野忠信、香川照之、仲村トオル

あらためて自らの仕事に対する「誇り」というものを自覚できるきっかけになるのではないかと期待しています。

測量技術者の社会的地位向上と測量技術の普及等が日本測量協会の重要な課題であり、そのような一環から「劔岳 点の記」には大きな関心と期待を寄せています。

そこで、二〇〇九年のこの映画上映の機会に向けて、映画会社、測量・地図の各団体と連携の上、「測量」という仕事についての啓発の発信に取り組んでいきたいと考えています。

木村大作監督の講演を聞く

去る二月十三日、東京・小石川の測量会館で「木村監督を囲む会」を開催しました。映画「劔岳 点の記」は、全体の四分の一を撮り終えたという段階です。この三月から第二次ロケ（春・夏）で本格的に柴崎測量官の測量に係わる

撮影シーンに入っていく予定と聞き、その前に木村監督のお話を聞く会を設け、監督の熱意をおうかがいするとともに、測量などに関する意見交換を行い、よりよい映画をつくらせていただくことを願って開催したものです。

はじめに、この秋ロケで収録した映像を五分ほどにまとめたプロモーションビデオの上映がありました。劔岳周辺の素晴らしい自然の映像と、主演の浅野忠信さんと香川照之さん、そして監督・スタッフの人たちが山岳ロケに苦闘する撮影現場のリアルな映像に参加者は言葉もないほど惹きつけられていました。

来場者の内訳は、国土地理院関係者、測量関連団体、報道関係、月刊『測量』誌の編集委員・執筆関係者、出版社、フジテレビ・東映の映画制作関係者・宣伝部など各方面からでした。これにTBSの番組「情熱大陸」のテレビクルーが、木村監督の密着取材でテレビカメラを終始回しているという活気のある雰囲気の中で開会になりました。

監督の熱弁は、情熱の大きさ故か語り出したら止まるところを知らず、質問からはかけ離れることもしばしばでした。今回の撮影現場の話、これまで撮った映画の話、一緒に仕



「木村監督を囲む会」の様子



測量会館一階にある「劔岳 点の記」コーナーに立つ木村監督

事をして大変尊敬しているという有名俳優さんのエピソードなど縦横無尽にわたりました。会場の聴衆は随所で大爆笑したり感心したりいうことで一時間半があつという間に過ぎてしまいました。

そのあと、質疑応答に入り、国土地理院東北地方測量部長からは「この秋に仙台で地図展をやりますが、ここに『劔岳 点の記』コーナーをつくりたい。ぜひ浅野忠信さんの測

量シーンの映像を流させてほしい」との要望や、測量団体から「何のために映画を撮るか大切なことと思うが、その点からの映画の位置づけを」といった質問があるなど、活発なやり取りは、まさに関心の高さを示すものでした。

監督は、「何のためにこの映画をつくるのか。それは崇高な使命感を持って、黙々と仕事をやる明治の日本人の姿を描きたい。これ

を見て、今の日本人が感動しなくなっているのだったらこの日本はおしまいだ」「皆さんの仕事を借りて日本人の素晴らしさを表現していきたい」「われわれは自然の中で生かされているだけだ。険しい山の中で豆粒みたいな人間が重い荷物を背負って歩いている人間を見てほしい。そこから何かを感じてほしい」と熱く語られました。そして「今日は皆さん一人一人の顔を見て話していると、同志になれた気持ちです。皆さんの映画ですからぜひ応援してください」とメッセージがありました。

日本測量協会の役員から「木村監督にこの映画を撮ってもらってうれしい。まず家族に、そして各方面に広報を拡げ、応援していきたいと思います」とお礼の言葉で終了になりました。講演のあとの監督の回りには、実際に基準点測量で苦労した国土地理院のOBや建設関連紙の記者たちで人垣は絶えず、木村監督も測量人との交流に充実したひとときとなったものと思われました。

『劔岳 点の記』の詳しい情報は、左記をご覧ください。

<http://www.jsurvey.jp/tsurugidake/index.htm>

<http://www.tsurugidake.jp/>

CE 建設業界 4

Civil Engineering

Volume 57, 2008

社団法人 日本土木工業協会

【行政の動き】

工事成績評定要領の改訂について

【フォトエッセイ】 歴史的建造物の新たな維持管理に向けて

コンクリート構造物の歴史的価値を 保存することの意味

